



対談

忘れてはいけない 井上作品の危なさ、怪しさ

松岡正剛 × 井上麻矢

編集工学者

こまつ座代表取締役

スベクタクル性のある
パロックの作家

井上 一番最初に先生がご覧になった井上作品はなんでしたか？

松岡 源内ですよ。劇団テアトル・エコーで観た『表裏源内蛙合戦』。

井上 そんな初期からご覧くださっているんですね！

松岡 当日パンフレットに書かれた井上さんの挨拶文が、非常にラディカルで驚きましたね。あんな挨拶文は前代未聞。パロディを超えたパロディというか、アナログア(類推)、ミメシス(模倣)、パロディア(諧謔)という3つの連想力を最初から備えている作家に初めて出会えた、と思っただ。舞台だから可能なのかもしれない。と思って小説を読んでみたら、この3つの要素が活字でも横溢(あふ)して、もつと驚いた。

井上 今回上演される『日の浦姫物語』も、グレゴリオ伝説、トーマス・マンの『選ばれし人』、『今昔説話抄』、『オイディプス』といった様々な物語の要素を併せ持った、究極のパロディのような戯曲なんです。ちなみ

に小説は、どれを最初に読まれたのですか？

松岡 最初は「吉里吉里人」だったかな。「四千万歩の男」も読みましたし、「東京セブンローズ」は皆に勧めています。

井上 そうでしたか。東北の一寒村が突如、日本からの独立を宣言する「吉里吉里人」が書かれたのは、私が小学校3年生の時です。執筆当時、部屋に父が描いた、三畳分くらいある吉里吉里国の手製の地図が広がっていたのを覚えています。火葬場も国会も実在する街のように描かれていて……。私はそこにリカちゃん人形を住まわせて遊んでいました(笑)。「今日は裁判所までお出かけよ」なんてやっていたら、すごく怒られましたけれど。

松岡 それは、写真を撮っておけばよかったですね。(笑)

井上 ところで、先生と父との交流が始まったのは、いつ頃でしょうか？

松岡 最初は、僕が選考委員を務めていた織部賞に井上さんが選ばれた時です。織部賞というのは岐阜県が生んだ茶人・古田織部の名前を冠した国際賞で、井上さんには岐阜卓での

受賞式においていただき、それはそれは楽しい2日間を過ごしました。

くへうげもの(※1)とも言われる織部は、それまでになかった独創的な茶碗を創って一世を風靡した人ですよ。つまり織部賞は、既成概念にとられず新しい表現を切り開く人を選ぶユニークな賞で、イタリアの建築家でインダストリアルデザイナーでもあるエットレ・ソットサス、フアッションデザイナーのジョン・ガリアーノ、ジャズピアニストの山下洋輔や舞踏家の大野一雄など、国内外の実に幅広いジャンルから選んでいました。建築家の磯崎新さんが選考委員長で、選考委員もアートが分かる方ばかりです。

井上 織部賞の由来を今日、初めて知りました。

松岡 でも10年間で選ばれた作家は井上さん、ただ一人だったんですよ。毎回何人かは作家も候補に挙がりま

したけれど、なかなか全員がオーケーという方がいなかった。

井上 そうでしたか。父も嬉しかったと思います。

松岡 じっくりお話しできたのは、あ

井上麻矢の
この人に
聞きたい

の時が初めてでした。僕は日本の焼き物文化におけるパロック(※2)の

誕生は織部からだと考えているのですが、「井上さんもパロックじゃないですか？」と申し上げると「それはいいなあ。自分も昭和パロックを志していたから」とおっしゃっていました。

多層的に組み合わせた表現を、どんな舞台でも小説でも試みていた方ですからね。思想家で文芸評論家のミ

ハイル・パフチンは、ドストエフスキ、あるいはラプレーの創作手法を

『ポリフォニー』、つまり多声文学と表現しましたが、これに当たる『スベクタクル』がある作家は、日本ではな

かなか見つからない。けれど、井上ひさしはこの系譜に入る珍しい作家だと思

います。そんな超大物なのに、ご本人は「いやいや」と常に謙遜ばかり

される……。実はあんなに謙遜される意味が僕は最後までよく分からな

かったんですけど。(笑)

井上 東北人独特の卑下(ひげま)慢(ま)ですね。「東北人は、僕なんて全然ダメなんです」と、卑下しながら自慢するんだ」と、本人がよく言っていました。(笑)

松岡 なるほど、寺山修司も石川啄木

もそうなのね。でも、慢(ま)はあったわけだ(笑)。そう考えると確かに、作品

への自信は相当ありだということは伝わってきました。

井上 ところで、父が地図や年表を作ってから創作に入るという過程が、

先ほど先生がおっしゃったような、パロック的な作風を成立させたということとは考えられますか？ 戻っていく場所

がありつつ、壊していくというか。

松岡 あるでしょうね。勝手に発想しただけでは要素がバラバラですから。全ての物語はトポス(場所)から

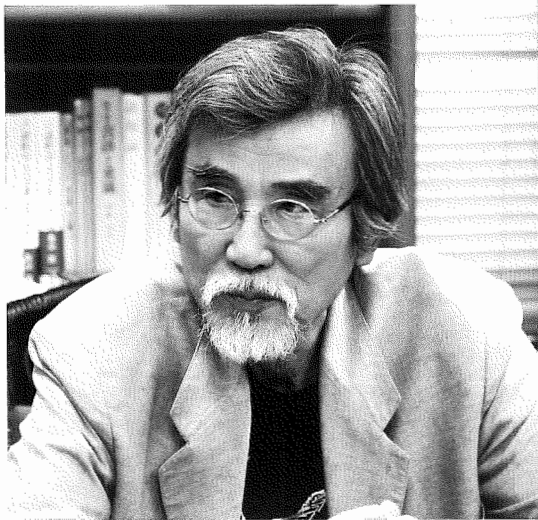
出ている、だからトピック(事柄)というのですが、トポスができてトピック

ができる、トピック(どこにもない場所)が立ち上がるんです。それが作家の世界。井上さんのすごいところはそのトピック、つまりテーマや

プロットを幾つも組み合わせ、そこに、今回は藤原時代にしようだとか戦後

に、今回は藤原時代にしようだとか戦後に入れ込む。演劇は、場所を自在に変えていけるんですよ。第1場で開いた窓の向こうは現代で、第2

場ではそこにトロイの戦火を見せるなんてこともできるわけです。パ



まつおか せいごう

1944年京都出身。82年、松岡正剛事務所を設立。87年、編集工学研究所を設立。情報文化と情報技術を繋ぐ方法論を体系化し、その成果を様々な企画に展開。2000年、ブックナビゲーション「千夜千冊」の連載を開始。同年、イシス編集学校を創立。近年は、本を媒介にした数々の実験的プロジェクトを展開。また、「日本という方法」を提唱し、私塾やサロンを主宰。

ロックは文学ではセルバンテスやゴンゴラが、絵画ではベラスケスやルーベンスが、彫刻ではベルニーニが才能を発揮しますが、いずれも多焦点なんですね。井上メソッドもバロックですよ。

編集の考え方を学んで

井上 自身と松岡先生の出会について少しお話しさせてください。こまつ座に入る前に私は、先生が編集・構成を手がけられた『冊』(※3)というブックギャラリーに勤めていて、それがきっかけとなって先生の講義「連塾」(※4)を聴きに伺い、お

話の内容、知識のアウトプットの仕方にすっかり魅せられてしまったんです。次から次に語り続けるエネルギーと知識量に、これは大変なものを見たと思われましたし、帰り道ものすごく自分の頭も良くなった気になりました(笑)。そこから先生のご著書を拝読し、(松岡が校長を務める)イシス編集学校を受講して。

松岡 そうでした。お父様から「編集学校では娘がお世話になっております」と言われ、手を握られたことがあります。娘さんのことが気になって仕方なかったんでしょうね。

井上 父には言いたいことを言っていましたし、目の上のたんこぶのよ

うな娘だったと思います(笑)。当時、父に「松岡先生の編集学校を受講する」と言ったら「あそこはすごく有名なんだよ。編集の考え方を構築していくところだから、すごく面白いと思う」と言われました。でもその後、こまつ座に入って、編集学校で学んだことがこんなにも応用できることに、とてもびびりました。

松岡 僕はいつも、編集的な発想力は、誰にでも、何にでも応用できると伝えようとしているので、そう言っていたら嬉しそうですね。

近親相姦的感情と浄化力

松岡 今日麻矢ちゃんにぜひお伝えしたいと思っていたことがあるんです。それは、井上作品が持つ危なさ、怪しさみたいなものも含めて、あの大きな才能をきちんとした形で伝えられるのは、批評家達ではなくて麻矢ちゃんしかないということなんです。これは僕の書評サイト「千夜千冊」(※5)の1625夜で、あなたがお父様とのやり取りを書いた「夜中の電話」を取り上げた時にも思ったことですが。

井上 確かに、聖人君子のように綺麗事にされてしまうのには違和感がありますね。高いところに崇められてしまうのは、昭和を生きた作家としても面白くないでしょうし、娘としては気持ち悪い部分もあります。ただそれを言葉で説明するのも難しいので、こまつ座に残された多様なお芝居を上演することが私の使命なのかなと思っています。「日の浦姫物語」をこまつ座で上演するのも、これが初めてなんです。日の浦姫とその兄・稲若、さらに実子・魚名との二重の近親相姦を通して、近親相姦的な日本作家の中の近親相姦的感情の懺悔を描いた戯曲なんです。

松岡 やはり面白い題材を選ばれていますよね。「古事記」で国造りを命じられて夫婦となるイザナミとイザナギも兄妹ですし、近親相姦的な日本は、ここから始まっていると言えるかもしれません。

井上 その近親相姦の懺悔を突き詰めていった先に、浄化があるのでないか、というのが、今回の演出家、鶴山さんのお考えのようです。松岡「浄化力」というのはあるでしょ

うね。例えば、「男はつらいよ」の寅さんと妹さくらの関係性を、誰も恋仲とは思わないけど、あれ以上の恋愛関係はない。と思わせる面もあるんじゃないですか。それを「日の浦姫物語」に重ねてみれば、フィクションを通し、観客側が何かを成就され、満たされたような感覚になる可能性はあるかもしれない。(女性の霊力に託された呪術的信仰について論述した)柳田國男「妹の力」じゃないけれど、何らかの浄化作用は生じる気がします。

未来へ伝える井上ひさしの魅力

井上 今年井上ひさし没後10年目

というメモリアルイヤーで、初期から晩年までの、多種多様な戯曲を連続上演しています。先生は、井上作品は今後、皆さんにどうやって愛されていくべきだと思いますか。松岡 まず大きなところからお話しすると、世界にもっと知られていい作家だと思えますね。バルガス・リョサやガルシア・マルケス、あるいはウンベルト・エーコのように、理論家で、小説も優れているという伝え方が必要でしょう。井上さんの文芸理論、社会考察といった側面から、グローバル・リテラチャー(国際的文学)として紹介されたほうがいい。だからもっと翻訳されるべきです。ロジャー・パルバースさんなんかがいんじゃないかな。

2つ目は「連想力」、冒頭に申し上げたアナロジーやパロディやミミックリーといった模倣というもの肯定する力を持つ作家だということが伝わるべきだね。ガブリエル・タルドの「模倣の法則」あるいはお父様も愛読書だ

とおっしゃっていたエーリッヒ・アウエルバッハの「ミメーシス」には模倣の考察が記されていますが、井上ひさしは模倣芸術の秘密を暴いた人ですよ。模倣こそ芸術の本質ですから、それを表現できた人として、もっと評価されるべきでしょうね。そして3つ目は劇作術。井上さんが描いたたくさんの登場人物、『道元の冒険』の道元でも、『頭痛肩こり樋口一葉』の一葉でもいいですけど、時代のトポスを開けた人物を一つ決めたら、そのキャラクターの魅力ある分身を作ることができる人なんです。これは今日言うアンドロイド、AI、あるいはスマホの自撮り、インスタグラムなど、メディアの中にメタモルフォーゼした別の自分を作り出す現代の技術にも近い。これは僕の言葉で言うところのプロファイルの多様性。なんだけれど、まさにプロフィールを多様化させる、分身力。のような劇作術を、井上さんは見事に作品の中で成立させているんです。こういった劇作術を、既存の演劇論ではない方法で論じたいと思う。

4つ目は、井上作品の魅力をもつ

と演出家に語ってもらいたいこと。演出家は全て見抜いていると思います。5つ目、最後は、井上さんの持っている大なる矛盾、これを麻矢ちゃんが言い続けることです。あなたにしか言えないこと、時には世間が気にくわれないことも、娘なら言う権利があります(笑)。井上ひさし幻想を壊しながら、もっと大きなビジョンに変化し、広げていく、それができるのはあなたしかいないです。から。

井上 今日、今後の自分の仕事、やらなくてはいけないことが明確になります。励ましていただいたような気がします。本当に有難うございました。

※1【へうげもの】ひょうげもの。剽軽、おどけ者の意。 ※2【パロック】ルネサンスの後に登場した、バランスを崩した複雑で動的な芸術様式 ※3【冊】文庫本を収容する書棚「糸宿房」と、全集を収容する書棚「冊集居」を併せ持つブックギャラリーカフェ。 ※4【連塾】映像や音楽を駆使して「日本という方法」を立体的に伝授する破格の講義シリーズ。2003~13年。のち書籍化。 ※5【千夜千冊】古今東西1600夜を超えるブックナビゲーションサイト。 <https://1000ya.isis.ne.jp/>